

トムラウシ山遭難

「大雪山系 死の行軍」
「日本百名山キバをむく」

週刊誌の記事の見出しだ。テレビや新聞でも連日取り上げられ、死者10名を出し、夏山史上最悪となった大雪山系での遭難事故は、山に登らない人々の関心も高かった。

フリークライマー平山ユージさんのワールドカップ総合優勝（98年・00年）、同じく先日の野口啓代さんのワールドカップ総合優勝、山野井泰史さんら世界的アルパインクライマーによる先鋭の登山や、第17回ピオレドール賞を受賞したカランカ北壁初登攀（一村文隆さん、佐藤裕介さん、天野和明さん）、カメット南東壁初登攀（平出和也さん、谷口けいさん）など、世界に誇れる日本登山界の朗報は取りざたされないだけに残念だ。

今回の事故は、自分の力ですべてをこなす正統派登山の枠を越え、中高年登山ブームにはじまる登山の大衆化・多様化によって、登山行為がビジネスとして成立する時代の問題点を浮き彫りにするものであった。

遭難事故の現場 大雪山・トムラウシ山

7月16日、死者9名を出したトムラウシ山は、北海道のほぼ中央に位置する大雪山連峰にある。アイヌの人々に「ヌタクカムシユベ」（一説に、河の廻流する所にたっている山）

と称せられ、古くから「カムイミクタラ」神々の遊ぶ庭、と呼ばれ愛されてきた大雪山の山々は、広く、たおやかで、大きい。

噴気活動をいまも行っている北海道最高峰の旭岳は標高2291m、トムラウシ山は標高2141m。どちらも深田久弥の日本百名山に選ばれた大雪の山である。標高こそ日本アルプスに及ばないが、のびやかな山肌いっぱい咲き乱れる高山植物群は、いつ見てもすばらしい。大雪の山々では標高1700m以上で高山植物を見ることができ、永久凍土や雪田（雪渓）が残ることなどから、花々の種類が多いことでも知られている。なかでも、トムラウシ山にあこがれる登山者は多い。表大雪の山々のなかでひととき特徴的な山容をもち、自然が豊かで奥深いからだ。ヒサゴ沼をはじめとしてたくさんある池沼、咲き乱れる花々に彩られるようにしてトムラウシ山は鎮座する。旭岳のように、ロープウェイという人工物を使って、安易に踏み込める山ではない奥深さが、トムラウシ山の魅力だ。

そんなトムラウシ山に、憂うべき話が浮上した。今回の遭難事故を機に、トムラウシ山に新たな避難小屋建設の話が持ち上がったことだ。

ここでは、夏山史上最悪といわれる遭難事故の検証を行いながら、山に登るといふことの意味、そして避難小屋建設について考えていきたい。



トムラウシ山（左奥）を背に、ヒサゴ沼を出て化雲岳にむかう登山者（写真・高桑信一）

本報文は、山岳雑誌「岳人」編集部及び筆者；岩城史枝氏の許可・承認を得て、「岳人」（東京新聞出版部）2009年10月号より転載したものである。

事故までの行動概要

参加者	ツアー一客	
	ガイド	ツアー一客
ツアー参加者	メインガイド (北海道32歳・Mガイドと表記) サブガイド (愛知38歳・Sガイドと表記) ガイド補助 (奈良60歳) ※引率ガイド3人のうち、Mガイドが3年前から重だけの契約社員、2人はアムステルダム社と契約を交わした専任ガイド (うちTガイドが日本山岳ガイド協会認定のトレッキングガイドだが旧認定のガイド)。山行中はメインガイド、ツアー一客全数をツアーリーダーがしきる。	戸田新介(愛知65歳) 前田和子(広島64) 真鍋紀余子(静岡55) 男性客A(岐阜69) 男性客B(広島64) 男性客C(山口61) 男性客D(愛知66) 女性客E(宮城68) 女性客F(広島61) 女性客G(広島62) 女性客H(愛知68) 女性客I(静岡69) 女性客J(愛知62) 女性客K(愛知69) 女性客L(岡山64)
日にち	行動の時刻	ツアー参加者への質問 (天気、雨具などの衣服や食糧など)
7月13日(月)	13時30分頃・ 17時00分前・	千千歳空港で各地から集合した客とガイドらが合流。バスで出発する。途中で登山用品店、コンビニに立ち寄る。 旭岳温泉白樺荘に到着。ガイドは、テレビの天気予報を見て、翌日14日の天候は良いが15、16日は崩れると予想。
7月14日(火)	6時00分・晴れ 9時00分・晴れ 14時45分頃・晴れ 夜中・雨	上川管内栗川町旭岳温泉の宿を6時に出て、6時10分頃旭岳ロープウェイ駅に到着。ロープウェイに乗車して姿見へ。6時30分頃にガイド3人、ガイド補助1人、ツアー一客15人の計19人で歩き出す。 9時に旭岳着。天気は良かったが、遠くの山の頂には雲がかかっており、トムラウシ山頂は雲の切れ間に時々見え、地帯谷からの風が吹いて肌寒く、雨具の上着を着用している人がほとんどだった。間宮岳、北海岳を経由し、白雲岳を往復してから白雲岳避難小屋に向かった。行動途中で体調が悪くなり吐いていた女性客がいた。 白雲岳避難小屋に到着。16時頃、ガイドが濡かした蓑を利用して各自夕飯を作った。食べ、戸田が17時頃に外のベンチで夕飯をとっていたときは雨の気配はない。ガイドは、携帯電話の天気サイトで上川地方の天気図を確認。翌日の午後に豪雨前線が通過して雲の心配がある、と出発時間を30分早めた(アムステルダム社の運搬事故の経過より)。19時消灯(消灯時間はとくになかったが、戸田は19時には寝ていた。前田は宮段から山では19時には横になるように心がけている。ほとんどの人が19時頃には就寝していた)。 雨が降りはじめ。
7月15日(水)	3時30分頃・雨 5時00分・雨 14時30分頃・雨 19時00分頃・雨	起床。 雨具上下を着て出発。風はほとんどない。忠別岳、五色岳の山頂を経由し、化雲岳は登らずに歩いてヒサコ沼避難小屋に降りる。土が濡されて深く掘れてしまった登山道には水溜まりが多く、道を運んで歩くため時間がかかり、調整のため休憩時間を1回5分と短めにした。この日、ほとんどの人の靴が濡れた。 ヒサコ沼避難小屋に到着する。2階には静岡からの6人パーティーと、旭岳に北上する夫婦連れがすでにいたため、ツアー一行は1階を使用する。先行者が濡れた衣服を着替えたためなので1階の床は濡れていた。避難小屋に到着した後は、着替えたり、濡れたものを干したりと忙しく過ごし、ガイドの濡かしたお湯等で各自夕飯を作って食べる。翌日の天気について、前日の天気予報から、午前中までは崩れるが午後からは大丈夫とMガイドは予想する。 ほとんどの人が就寝。このころ雨は降っていたが、トイレに出たときなど多少濡れるくらいで、びしょ濡れになる雨ではなかったため、前田は手洗いに招まれて足をはいた。濡れた衣服や装備は頭上や足上に干して濡れたが、水滴が落ちてきたりした。また、濡れたシュラフに入って濡れた人もいたようだ。

Q=14日の天気はどうでしたか？何を着て歩きましたか？

戸田●晴れていたが、遠くの山にガスがかかり、時々山頂が見えるような天気。普段は普通用の長そでジャケット(モンベルのジョーライオン3D・ポリエステル100%)のみ。この日はゴアの雨具の上を着用した。下は、トランクス、サポータータイツ(CWXX)、登山用ズボン。前田●晴れていたが肌寒く、いつもの長そで1枚(ノースフェイスのジップアップジャケット・ポリエステル100%)で歩くが、防寒着の1つに持参した薄手のジャケット(夫のお古のゴルフ用ジャケット)をはおって行動した。下は、登山用ズボン、サポータータイツ(CWXX)。真鍋●濡れていたが肌寒いので雨具をはおった。着ていたのは、山用の長そでのハイネックジャケット(ポリエステル97%、ナイロン3%)の上に半そでのジャケット(ポリエステル100%)。下は、登山用ズボン(ナイロン、アクリル、ポリエステル、毛)、サポータータイツ(CWXX)。下着も山用(ポリエステル、ポリエステル)。

Q=白雲岳避難小屋での夕飯は何を食べましたか？

戸田●レトルトのカレー、レトルトの御飯(半分残す)、紅茶。
前田●2食入りα化米/β化米の半分、コンスーメ、お肉のソーセージ、きなこ棒2本。16時には食べていた。あとサブライメント、アミノバイタル。
真鍋●弁当の残りのおむすび1個とおかず、フリーストライの味噌汁、キュウリ、トマト。

Q=白雲岳避難小屋での朝食は何を食べましたか？

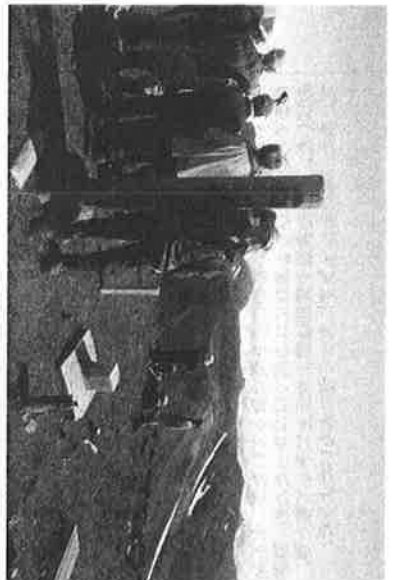
戸田●インスタントラーメンの冷たくなったもの(前日に朝食を作っておくようにガイドがいうから)。
前田●昨夜の残りのα化米、ワカメスープ、お肉のソーセージ。
真鍋●α化米、フリーストライのスープ。

Q=あなただけの雨具は？

戸田●登山店で買ったゴアの雨具上下で3年ほど経過。防水性は少し弱くなっているかも。前田●登山店で買ったゴアの雨具上下。長期山行は、いつも夫の山サイズを持参する。そこで長いから雨が降っても手がすっぽり覆えるため冷えを防げる。それでも今回は下山したら左手がしゅしゃべりになっていった。この日はサポータータイツの上に直接雨具をはいて歩いた。真鍋●登山店で買ったゴアの雨具上下。購入して3年目くらい。専用の洗剤と防水機能を保持するスプレーを使用。ひざ下丈のゴアのズボンも使用した。折りたたみ傘も持参。

Q=15日の天気は？

戸田●強く降ることはなかったが、全身がくまなく濡れる雨で、霧雨のような雨。メガネの外側に水滴がつき、内側は曇った。小川のような登山道で靴がグズグズに濡れた。前田●サンザン降りではなく、細かな雨粒のしとしと雨。全身びしょ濡れ。水滴と曇ったメガネに足場がよく見えず、歩きにくかった。
真鍋●昔にはならない程度の雨で、視界があった。振り返ると時々旭岳の山腹がガスの合間に見えたりもした。



14日は晴れていた。旭岳にて。写真提供・戸田新介

7月16日(木)

3時30分・雨と風

起床。

5時30分・雨と風
5時出発の予定であったが、天候悪化のため少し待機したのち、5時30分に出発する。出発時、何人かの客は外の様子をみて出発することに不安を感じたという。また、行動するのはやめたほうがいいのではないかとという客からの声もあったという（戸田・前田・真鍋ともにトイレ等で席をはずしていたときなのか聞いていない）。沼ノ原から登ってくる自社のツプラー一用、10人用ツプラー、コンロ、ガスカートリッジ、鍋などの山行装備を小屋に置いてツプラー一行は出発する。

出発後すぐに今山行ではじめてアライゼンをつける。手間取っている客らにガイド補助がアライゼンをつけてまわる。ガイド補助は空身で雪渓上部まで同行し、次の客の場所取りのため、装備品の管理のために避難小屋に戻る。ここからツプラー客15人＋ガイド3人になる。稜線にあがると風は強くなったが、まだ歩けないほどではなかった。天沼手前と天沼付近で5分ほど休憩する。

天沼を過ぎ、日本庭園に差し掛かりはじめると非常に風が強くなる（クワクワンナイ川源流部からの風）。木道のあるあたりが特に強烈な風。ロックガーデンまで風速毎秒20～25mの強風にまともに歩けず、立っていられずに転ぶ人が続出する。先頭をゆくMガイドの音が全員に届かない。真ん中あたりにいたSガイドが「風が強くて吹いたらしやがんで」と繰り返した。このときの推定気温は7～10度。このあたりから客の歩行状態にはばらつきが出はじめる。

8時30分頃・

ロックガーデンに到着。ヒサゴ沼からここまで通常の参考タイムは1時間30分ほどだが、倍の約3時間かかる。

10時30分頃・

通常の参考タイムはヒサゴ沼から2時間30分であるが、約5時間あまりをかけて北沼に到着する。降雨により北沼からあふれた水が幅2mほどの川となって登山道を横切っていたため、パーテナーのうち何人かがMガイドとSガイドの助けを借りて流れをわたる。女性客がふらついた拍子に、Sガイドは転倒し全身を濡らす。徒歩に躊躇する女性客もあり、Mガイドが少しでも渡りやすそうな場所を探して徒歩させるなどする。全員が渡るまでにかかりの時間を要した。

Q＝行動中に食べたものは？

戸田●パン（チーズ入り1つ、あん入り1つ、チョコ入り1つ）、

前田●大福1つ。ごまごまとしたもの（小豆キャラメル、ハッカ飴、塩飴、梅昆布）。

真鍋●バナナ1個、ウイダーインゼリー、ソイジョイ1個、チョコ3個、鉛2個、ナッツ類、蜂蜜。

Q＝雨のなか行動して、衣服や荷物は濡れましたか？

戸田●下着までずぶ濡れ。靴も。靴下はしほれるほど。サボートライツも脱ぎ、下着までずぶ濡れ着替えたが、「着干しする」といつていた人もいた。シュラフが半分ほど濡れた。前田●全身濡れ、靴下もしぼった。女性はお互いに目隠しをして着替えた。私は下着以外を全部着替えたが、その後下着も脱がばよかつたと後悔した。ザツクの底に入れておいた防寒着のフリース（中厚手）が行動中に濡れてしまった。反省している。

真鍋●シャツとサボートライツは濡れたが下着は湿った程度。上半身全部着替え、サボートライツも着替えた。靴と靴下は濡れたので、靴下は履き替え、靴には新聞紙を入れて一度取り替えた。朝は少し湿っている程度に、ザツクの中の荷物は袋に入れていたので濡れていなかった。

Q＝ヒサゴ沼避難小屋での夕食は何を食べましたか？

戸田●レトルトのカレー、レトルトの御飯。

前田●2食分入りのα化米半分、スープ、お肉のソーセージ、きなこ棒2本。

真鍋●α化米、フリースドライの味噌汁、汁粉、キュウリ、トマト、ホタテの干物。

Q＝よく眠れましたか？

戸田●買い物用ビニール袋1枚にパックンクンしておいたシュラフが半分ほど濡れていたため、持ってきたシュラフカバーを濡れたシュラフの中に入れて寝た。全身着替えたこともあり、快適にぐっすり寝られた。一度目が覚めた2時頃、風の音がこもった。

前田●シュラフはまったく濡れていなかった。足下までカバーする全身用エアウェット（クーレスト）を敷いて寝た。靴下の替えがなく兼足で寝たが熟睡できた（山ではいつも睡眠導入剤使用）。1階は狭く、2階で寝てもいいといわれて上で寝たが、2階は暖気が上がっていたため1階よりも寝かかった。

真鍋●シュラフは濡れていないが、床が濡れていたのと窓際からの吹き込みでよくは眠れなかった。前日のほうが眠れたが、今回は避難小屋泊まりということで、快適には眠れないだろうとくる前から覚悟できていた。夜中の1時ころから雨と風が強くなった。

Q＝ヒサゴ沼避難小屋での朝食は何を食べましたか？

戸田●投入りのラーメン。この日は温かいものを食べた。

前田●2食分入りのα化米半分、スープ、お肉のソーセージ、サリメント、トミンバイタル。

真鍋●α化米、フリースドライのスープ。

Q＝ヒサゴ沼避難小屋を出るときは天気は？

戸田●どちらかという雨より風が気になる感じだったが、最終日だし出発すると思っていた。出発予定の5時前、トイレから帰ってきて、横で寝た男性に出発が30分のびたと聞いた。

前田●起きたとき雨はひどくなかった。どちらかというところと気になるのは風の方、というくらい。出発するときも同じような天気。2階で準備していたので、出発前の1階でのやりとりはよく聞こえなかった。5時30分に出発がのびた、というのには聞こえた。

Q＝何を着て出発しましたか？

戸田●初日（上記参照）と同じ服装に上下雨具。日本庭園の手前あたりで、歩いていてさきに出でザツクからフリースを出して1枚足した。

前田●昨日の濡れたシャツは着ないで、着替えて寝た服装で（ボリエンステル100%の長そで）。フリースを着たが濡らしてしまっていたため、温泉宿でもらったタオルに首が出るように切れ込みを入れてかぶり、ウインドブレーカーを着た上に雨具。

真鍋●昨日濡れて脱いだものは着なかった。初日と同じような服装に上下雨具。北沼をわたる前か、後かの記憶が定かではないが、行動中（休憩の時ははかかっていない）。徒歩の待ち時間（とと思う）に風雨の中でフリースを1枚着た。

北沼の徒渉を終えたすぐ先の分岐で女性客Hが（低体温症のため）歩行困難になり、ガイドの声にも反応はほとんどなく、声も出なくなる。ガイドたちはその聲にかかり切りのような状態になり、パーテナーは風雨にさらされて1時間30分ほど待つことになる（北沼の徒渉待ち時間含めてか？）。盛り込んだ人の前に誰だか3人が並んで風よけを作るなどしていたが、ほかの客から「寒い寒い」という声や奇声をあげる女性客Iも出はじめ、状況を見て戸田は「このままではよくない」と誰に言うともなく大きな声を出して一喝し、救助要請を口にした。

救助要請の声に、Mガイドは歩ける人だけで先行すると言い、動けなくなった女性客Iに付き添いのTガイドとSガイドを残してパーテナーは先に進む。歩き出してまもなくの雪深手前でMガイドが人数を確認すると客2名が足りなかったのだが、最後尾にSガイドがいた（SIは女性客を追いこしたのか？）。MガイドはSガイドに、少し先に風がしのげる場所があるので本隊はそこで待つように指示して、Mガイドは北沼分岐付近に戻る。残っていた女性客2人を1人ずつ背負って雪原を登ると、女性客1人と介護している男性客Aがいた。Mガイドは、2〜3分先にいた本隊に追いつき、行動不能の人にはビバーク、Sガイドは動ける客を連れて下山するように指示をした。意識不明になった女性客1人、歩行困難になった女性客2人、付き添いの男性客A、Mガイドがビバークすることになる。また、ここで再度救助要請の要望が客から出るが、Mガイド率いるビバーク組とSガイドが率いる本隊とに分かれる。

Sガイドと客10人はトムラウシ山頂を西側のルートから巻いて下山を開始する。MガイドがSガイドに分岐では点呼するように指示していたが、Sガイドは途中で後続者の人数を確認することなく、速いペースで進む。そのため客11人のうちSガイド含む3人が先行、残りの客8人がついて行くすべしはじめ、トムラウシ分岐の時点ですでに本隊ははばらであつた（無我夢中でSガイドについて歩いた客含め、客は点呼を聞いていない）。

そのころ、北沼付近でビバークを決めたMガイド、客4人（女性3人・男性1人）のうち、女性客1人がツェルトに入ってからしばらくした後、脈拍が停止する。

トムラウシ分岐手前5分ほどのあたりですでに本隊から2人離れる。ふらついた男性客Dを男性客Cが介護していたのだが、Dが意識をなくしたので男性客Cは歩き出す。途中に動けない状態の女性客2人がいて介抱したが、その甲斐なく意識をなくしたため男性はその場を離れる。さらにトムラウシ公園に向かつて行くとシヨウラフに包まれた女性客Iと付き添う女性客（真鍋）と会う。真鍋は元気にその見えたがこの場を離れたくないと話し、無理強いしはせず男性客Cは下山を続ける。

本隊のうちSガイドと女性客（前田）が前トム平に到着。Sガイドが後続を気にする様子は特になく、雨は上がっており、風も弱まっていたが霧で視界が悪かった。前田はこの前トム平以降、持参した地図をみても現在地がどこか分からなかったという（前トム平には立派な標柱あり）。

15時54分・前トム平からコラトリ沢分岐に向かう途中、岩場などでSガイドが何度も盛り込んだの前田が「あなたももかいるんではないよう。頑張らなさい」などSガイドを励ます。15時48分、前田の夫から携帯電話に着信があり電話が通じることがわかる。Sガイドに頼まれて前田がこの山行で最初の110番通報を行う。警察に現在地を聞かれたが答えられなかったためSガイドに代わったが、疲勞のためか聞かれない状態であった。携帯電話の電池が会話の途中で切れては電池を暖めてを3〜4回繰り返しかえす。Sガイドはツア一会社名等を名乗ることとはなく、自分のことなのか「ポーター」という言葉を何度も口にする。完全に電池が切れた後、Sガイドに携帯を出すように何度も言う。前田と男性客Bが早く電話をかけて何度言っても、誰と話すわけでもなく指で番号をずっと打っていた（メールか？）。

Q＝出発してから北沼あたりまでの天気は？

戸田●とにかく風が強かったのは日本庭園の先からロツクガクンあたりの木道のある場所。強風地帯に差し掛かる前、歩いているときに前に出てフリースを濡した。雨具を脱いだときに乾いている服が濡れてしまうのが嫌だと思ったが、着たことで体が楽になった。前田●日本庭園あたりの木道の風がすごかった。しゃがんで木道の端をつかんでいた。風が少し弱まったときに横移動した。北沼の水面が波打っていた。

真鍋●後続に出てから風雨が強くなり、吹き飛ばされそうなきはしゃがんだ。トムラウシに向かう途中の登りでは、水が勢いよく流れできて沢登りをしているようだった。行動中に風雨の中でフリースを1枚濡した。ザツクの上方に入れておいたので出しやすかった。中の方に入れていたとしたら、あの風雨の中では出せなかったのではないかとと思う。

Q＝北沼のおふれた水をおわたるとき、どこが濡れましたか？

戸田●列の真ん中あたりにいたが、自分が渡るときの水位は15cmくらい。靴のかかと上部から水が入ったのを感じた。トムラウシの斜面から滝のようになって北沼に水が流れているのが見えた。ゴアのロングスバックスを着用していた。

前田●列の最後を歩いていたが前が進まず、流れの中で待っていて濡れてしまうよりは早く渡ってしまおうと思い、列の横を抜けて渡った。水位はひざ下。かなり流れがあった。真鍋●どちらかという列の後ろの方だった。足のくるぶしくらいまで水につかって渡ったと思う。ひざ下まであるゴアのズバックスを着用していた。Mガイドにしがみついて渡った。

Q＝避難小屋から北沼の先での長い待ち時間までの間に何か食べましたか？

戸田●アミノバイタル3袋、カロリーメイトを2種類×2箱。出発前にポッケットに入れておいた。前田●ポッケットに入れておいた細々としたもの（キヤラムル、塩飴、梅昆布など）。真鍋●ライオンインゼリー、ソイジョイ1個、バナナ、チョコ3個、ナッツ類。ザツクのウエストベルトにポッケットがあり、普段からそのポッケットに細々とした食糧を入れていて、お腹が減ったときには食べるようにしている。

Q＝北沼の先へ下山する（救助される）までの間に、何を食べましたか？

戸田●下山を開始してからはほとんど食べなかった。水もあまり飲まなかった。夜1時半にビバークしたとき、ザツクからカレードーナツを出して1個食べた。前田●カロリーメイト1本（1本はガイドにあげた）、きなこ糰、アリエリアを飲んだ。糰粒のアミノバイタル3、4袋をSガイドが一緒に飲もうとしたので、1袋もらった。真鍋●16時頃、トムラウシ公園より上だったと思うが、登山道から少し入った草むらでチョコを食べた。それから18時頃にパン（ワッフル）、チョコ、羊かんを、朝3時過ぎにパン（ワッフル）を食べた。それから下山をはじめた。1時間半ほど歩いたところで救助された。



戸田氏の山行中の食糧

16時～18時前頃・	トムラウジ公園手前にいた真鍋は、自分のシュトラフを介抱していた女性が冷たくなり、座っていたため自分の体力は回復していたので下山を考える。しかし、いまから下りてもすでに暗くなり、道迷い等懸念されるため、ヒダマが気にはなっていたが登山道から5～10mほど入った葎むらでビバークを決める。意識のなくなった女性の荷物からシュトラフを出して彼女にかけ直し、早朝の下山に備えて自分のシュトラフとマツトに横になる。翌日の3:28に歩き出す。
16時30分・	Sがイトは歩くことができなかったため、前田は追いついてきた男性客Bとともに、その場にSがイトを残して下山を開始する。
17時00分前・	Mがイトが、ツェルト(男性客Aの私物)まで様子を見に行くと、そこに入っていた女性客HとTがイトは絶望的な状況であった。Mがイトは南沼キヤンフ地方面に歩き、携帯の電波が入る場所を探し、アミューズトラベル社に、「すみません。7人下山できません。救助要請します」(4人くらいだめかもしれないです)といった内容のメールを16時49分に送信する。その先少し歩くと男性客Dがうずくまっていた(意識は未確認か?)。さらに先に置いていたビニールシートの中敷があり、中にランポン、毛布、ガスコンロを見つけた(のちに登山道整備業者が非常時に残していた装備品と判明)。Mがイトは倒れていた男性客に毛布をかけてビバーク地へ戻り、捨てたランポンを付き添いで残った男性客Aと立て、お湯を沸かす(それまでは、男性客の持参したコンロ類などが使われていた)。その後、介抱されていた女性客1人がいびきをかきはじめるとともに体温が下がってゆき、意識が遠のいたため、男性客らがお話をさすり、名前を呼び、「頑張て」と声をかけたが脈がなくなる。Mがイトが心臓マッサージをしたが、意識は戻らなかった。
17時00分前後・	15時54分の110番通報を受けてヘリコプターによる捜索を開始するが、悪天候による視界不良のために40分ほどで捜索を断念。
19時10分頃・	Mがイトは飲料水確保のため南沼方面に行き、携帯電話でアミューズトラベル本社と松下政社社長と(その後に警察と?)話す。
20時30分頃か・	ビバーク中のMがイトが携帯電話で新得響に連絡、女性客らが意識不明などの状況説明をする。その際、生死不明の男性1人が近くに倒れているのを目撃したことも伝える。
22時00分・	新得響と決めた定時連絡時刻、ビバーク中のGがイトから新得響への連絡はなし。
22時15分頃・	救急車が短縮コース登山口に到着する。
23時00分頃・	新得響からビバーク中のMがイトに電話を入れるが、電波不良のためか不通。
23時45分頃・	新得響が道を通じて正式に自衛隊へ救助要請をする。
23時50分頃・	前田と男性客Bがトムラウジ温泉コースを自力下山、林道に出たところを車に拾われ短縮登山口へ。
7月17日(金)	00時55分頃・ 男性客C、女性客Eがトムラウジ温泉登山口に自力下山。2人は当初戸田と3人で下山しはじめたが途中で離れたと話す。 1時10分・ 自衛隊員が新得響に到着する。 3時30分・ 下山をした女性客らからツア一客が離れ離れになった様子が語られはじめる。 3時53分・ 警察、消防署員の各3人計6人が短縮コース登山口から合同捜索を開始する。 4時00分・ 道警航空隊、自衛隊のヘリコプターなど3機が捜索を開始する。 4時38分・ 道警ヘリが前トム平で意識不明の女性客1人を収容。 4時45分・ 下山途中で仮眠をした戸田がトムラウジ温泉登山口に自力下山。 5時01分・ 道警ヘリが前トム平で意識不明の女性客1人を収容。 5時16分・ 道警ヘリが前トム平付近で自力歩行が可能な真鍋、さらに意識不明の女性客1人を発見。 5時35分・ 道警ヘリがトムラウジ分岐付近で意識不明の男性客1人を収容。 5時45分・ 道警ヘリが北沼西側付近で手を振っている2人、倒れている2人を発見する。 6時31分・ 道警ヘリが南沼キヤンフ場付近で遺体になるまわっている意識不明の男性1人を発見。 6時50分・ 陸上自衛隊ヘリが、Mがイト、Tがイト、男性客1人、女性客4人を収容。うちTがイト、女性客3人が意識不明。 9時36分・ 陸上自衛隊ヘリが南沼付近で単独登山者の男性(64歳)の遺体を収容。
10時00分までに	単独行者含む9人の死亡を確認。午前6時頃から相次いで遭難者(計7人)が搬送された十勝管内清水町の清水赤十字病院の医師らによると、「遭難者はいずれも下着まで濡れて、体は冷え切っていた。7人全員が足などに凍傷の膏あざがあり、強風にあおられて岩場で転倒したのではないかと、また「最初に搬送された男性には強い刺殺とやんばりなサージなど20分ほど治療をほどこしたが、蘇生しなかった」と25日付の北海道新聞にコメントが掲載された。
10時44分・	コマドリ沢付近の豊楽で最後まで行方わからなかったSがイトが倒れていたのを登山者が発見、110番通報。意識あり、自分の名を告げる(救助隊が見つけられなかったのは?)。
12時00分・	道警がすべての捜索活動を終了。
7月18日(土)	司法解剖の結果、ツア一客7人とTがイトの死因はいずれも低体温症による凍死と判明(単独登山者は司法解剖していない)。死亡推定時刻は遭難翌日の17日未明だった。



この表は8月20日時点の新聞報道・取材をもとにまとめた

■トムラウシ遭難事故 ツアー登山の背景

まず前頁までの「事故までの行動概要」に目を通していただきたい。

低体温症により亡くなった10名のうち、9名がトムラウシ山で命を落としていた(1名は美瑛岳)。そのうちの8名が、創業1991年のアミューズトラベル社が応募した「大雪山 旭岳からトムラウシ山縦走」ツアー登山の参加者だ。

ツアー行程を簡単に説明すると、13日▼新千歳空港に集合、買い出しを済ませて旭岳温泉に宿泊。

14日▼旭岳ロープウェイを使って入山し、旭岳・間宮岳、北海岳を経由、白雲岳を往復して白雲岳避難小屋泊(12・5時、8時間)。

15日▼忠別岳、五色岳を越えてヒサゴ沼避難小屋泊(16・5時、10時間)。

16日▼トムラウシ山を越えてトムラウシ温泉登山口(下山) トムラウシ温泉泊(12・5時、10時間半)。

17日▼新千歳空港から各空港へ帰京というもの(ツアーの応募概要は表1参照)。

ツアーの人数は、愛知・広島・山口・岡山・岐阜・静岡・宮城から参加した15名のツアー客と、北海道・愛知・広島・ネパールのガイド4名(うち1名ガイド補助)、合わせて19名。山行最終日の16日、ツアー客15名のうち、実に約半分の7名と、ガイド1名の命がトムラウシ山で失われたことになる。

■ツアー登山のメリット? 登山ブームとツアー登山

「ツアー」と「登山」の言葉のあいだに、観光や旅行、という言葉が見え隠れする「ツアー登山」。年々山の奥深くまで足をのぼすようになったツアー登山を「このままで

はいつか……」と危険視する声は少なくなかった。山に登るといふ行為は、準備も含め、人任せにするものではない。個々の体力・技術・山に対する気持ち(心の準備)が大切だからだ。

今回の事故は、90年代からはじまる中年登山ブームに乗って、需要をのぼしてきたツアー登山業界と利用者に対し、「登山とは何か」という問題を投げかけるものとなった。

それでも、「事故を起こした会社が続けるかはしないか、ツアー登山そのものは需要があるのだからなくならんよ。だからこそツアー登山というものをきちんと考えていかなければいけない」と、戸田新介さん(65歳、今回のツアーに参加して自力下山をしたひとり)。

戸田さんの言葉のとおり、8人の命が失われた今も、アミューズトラベル社はトムラウシ山ツアー以外の夏のツアー登山を実施している。すでに申し込みを終えているツアー客から、「今からでは他のツアー会社の山行には参加できないからツアーを実施してほしい」との要望が多く寄せられたからだ。

戸田さんは、32歳ごろに山登りをはじめた。テントを背負い、甥の荷物を背負って2人で行くこともあったが、ほとんどが単独、日本アルプスによく出かけていた。戸田さんがツアー登山を利用するようになったのは、仕事が忙しくなったからだ。

平日は仕事で動き回りながら週末のツアー登山に参加するようになった。「荷物をそろえるだけで、なんの予備知識も身につけずに行かれる。ツアー登山のよさはそこにあると思っていました。今回も2日前に荷物を揃えていたらく……でも、やはり山に行くにはこれではいかん、改めてそう思いました」と、山行前の自分を振り返る。

「ただ、自己責任論が亡くなられた人に対して唱えられることには、『ちよつと違うぞ』と思っています。不可抗力の要素はあると思います。が、それに対する一定のサポートは、ツアー登山主催者側からあつてしかるべきだと思えます。それがツアー登山だと思えます。突然サバイバルの場に連れてこられて命を失ってしまった人たちに代わって、『それは違うぞ』と訴えたい。

どうして8名もの命が失われることになってしまったのか、自分には知らせる義務があると思っています。それから、低体温症の知識です。ガイドたちに低体温症の知識があったとは思えません。自分にその知識があれば、もっと早くに対策を要求できた。それが悔やまれます」

■原因はどこにあったのか ツアー登山の中身

事故のあった山行3日目の16日、雨のなか、朝5時30分にツアーは出発する。稜線に出るまでの急な雪渓を一行が登り終えると、ガイド補助はヒサゴ沼避難小屋に戻り、ここからガイドは3名となる。

ガイド補助が避難小屋に残ったのは、自社のツアーのための場所取りと引き渡す装備の管理があったからだが、ここに今回の遭難におけるひとつの要因がある。

小屋に置いていった装備は、10人用テント、シート、コンロ、ガスカートリッジ、鍋など山行に必要なものばかり。実は、この日の午後には次のツアーが別ルートからヒサゴ沼避難小屋に到着し、この装備を使用することになっていた。

事故のあったツアーは1人15万2千円×限定15人。これだけで228万円の金銭が動く。翌日にヒサゴ沼避難小屋泊のツアーは14万6千円×

限定15人で219万円。ここから諸々の経費が落とされるとはいえ、大金が動くことには違いない。

調べてみると7月下旬には、ヒサゴ沼避難小屋に、26、27、28、29日と入れ替わり立ち替わりアミューズトラベル社の4つのツアーが連日泊まる設定になっていた。前記と同じくひとつのツアーで200万円以上が動くと考えられる……。北海道のツアー登山が「ドル箱」といわれるゆえんだ。事故時と同じように、装備の受け渡しを山中で行う予定があつたかはわからないが、同一会社のツアーが、連日にわたり避難小屋を宿泊施設のように利用するという現実にも愕然とする。

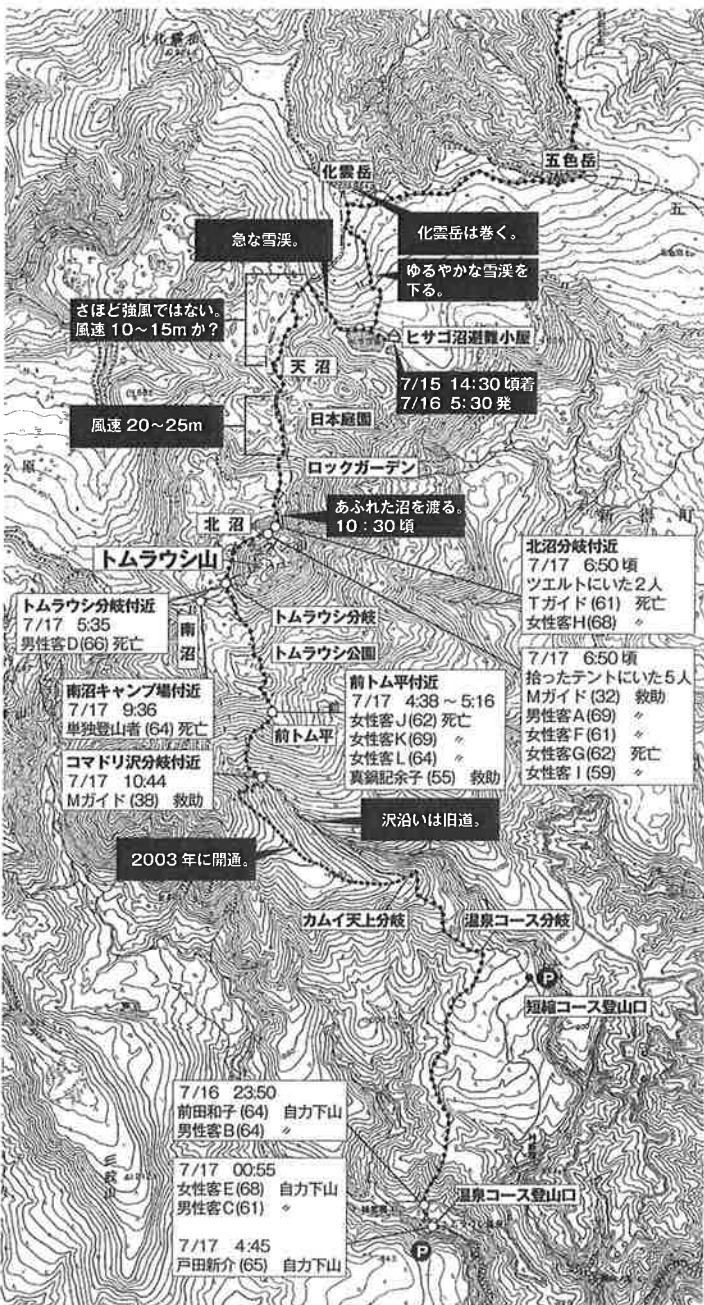
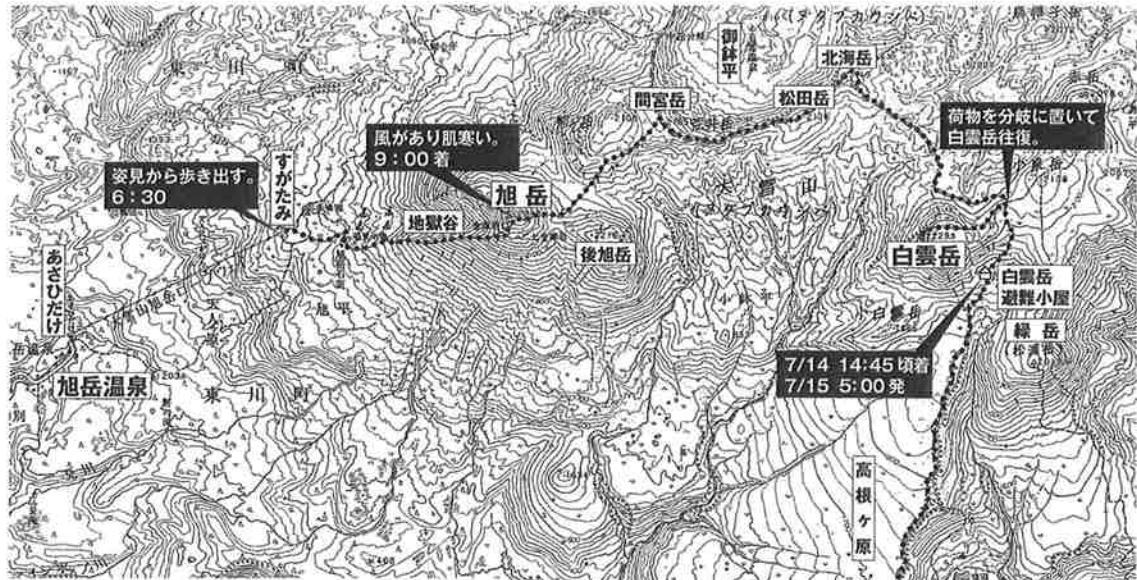
避難小屋というのは本来、必要な装備を自分で背負って山に向かう登山者が、緊急に避難する場所として設けられたものである。これでは、避難小屋をツアー団体で利用するという行為そのものに、苦言を呈したくなるのが登山者側の心情だ。ツアー会社は、トムラウシ山を、

表1

「大雪山 旭岳からトムラウシ山縦走」ツアー応募概要	
体力度	★★★★ (やや健脚。歩行距離、歩行時間、標高差が比較的長くて大きいコース。★5つが最高位)。
技術度	★★ (やや難しい。クサリ場、ハンゴ、雪渓等の危険箇所があるコース。★4つが最高位)。
参加条件	70歳以下であること、過去1年以内に「体力度★★★★」以上のツアーに参加した人。限定15名。寝袋と食糧の準備運搬は各自。お湯はスタッフが用意する。各無人小屋の混雑状況によってはテント泊になる場合もある。
参加費	15万2千円。
※参考までにアミューズトラベル社の★★★★★のツアーは、「幌尻岳・戸蔵別岳縦走」「飯豊連峰縦走」「雪倉岳から相海新道」「高天原温泉から赤牛岳・読売新道」などがある。	



岩の積み重なりがトムラウシ山の特徴。ナキウサギなど貴重な動物が生息する



ヒサゴ沼は昔から登山者のオアシス。今回の事故を嘆き、いっそのことヒサゴ沼避難小屋(154頁の下地写真)を撤去すべきだと口にする登山者も多い。161頁まで写真=高桑信一